



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | レヴィナスにおけるクィアな可能性を開くために :<br>『全体性と無限』における繁殖性の問題から後期レ<br>ヴィナスの展開へ             |
| Author(s)    | 古怒田, 望人                                                                     |
| Citation     | 年報人間科学. 2024, 45, p. 17-30                                                  |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/94574">https://doi.org/10.18910/94574</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 〈論文〉

レヴィナスにおけるクィアな可能性を開くために  
——『全体性と無限』における繁殖性の問題から後期レヴィナスの展開へ

古怒田 望人

## 要旨

本論の目的は、E・レヴィナスのセクシュアリティ論の規範性を批判的に検討しつつ、その規範性にもかかわらず現れる可能性を提示することにある。そのために、彼のセクシュアリティ論の規範性と可能性を、「クィア」の観点から浮き彫りにすることを試みる。

本論は次のように展開する。第二節では、『全体性と無限』のセクシュアリティ論を時間論の観点から批判的に検討するための文献学的な足掛かりを作る。第三節では、繁殖性の時間構造が生殖を特権化する家父長的で、異性愛中心主義的かつシスジェンダー中心主義的な観点にあることを、『全体性と無限』第四部の「女性的なもの」概念から繁殖性概念へ至る時間論の展開から示す。第四節では、後期レヴィナスの記述が、この繁殖性概念の規範性から逸脱し、クィアな読解可能性を含むことを論証する。そのためにまず、後期レヴィナスの老化論を読解し、この老化論がM・ブルーストの『失われた時を求めて』におけるセクシュアルな関係性の観点から具体化可能なことを示す。そしてさらに、レヴィナスのブルースト読解が表面上前提とする異性愛中心主義に反し、異性間の生殖から逸脱するクィアな身体性を『存在の彼方へ』(1974)の愛撫論が示すことを論じる。

## キーワード

エマニュエル・レヴィナス、セクシュアリティ、クィア、クィア理論、繁殖性

## 1. はじめに

E・レヴィナスの思想の着想と主題の一つにセクシュアリティの観点があることが、第二次世界大戦中の捕囚手帳等の最新の資料から明らかにされ、近年注目を集めている (cf. ベンスーサン, 2014、渡名喜, 2021、古怒田, 2022)。事実、彼の中心概念と知られる他者概念が公刊著作で初めて主題化されるのは、愛撫というセクシュアルな経験からだ (cf. EE: 66)。本論の目的は、彼のこのセクシュアリティ論の規範性を批判的に検討しつつ、その規範性にもかかわらず現れる可能性を提示することにある。そのために、彼のセクシュアリティ論の規範性と可能性を、「クィア (queer)」の観点から浮き彫りにすることを試みる (本論での「クィア」は、規範的＝典型的なジェンダー、セクシュアリティから逸脱する存在を意味する)。具体的には、1) 『全体性と無限』(1961、以下TI) がクィアの実在を抹消する点、2) このTIの規範性が

ら後期レヴィナスのテキストが逸脱しクィアな読解可能性を示す点を論じる。

確かに、レヴィナスは1940年代の捕囚手帳で「男色家」を「病人に過ぎない」と断定しているが(CEI: 161)、彼は、エイズ危機が顕在化し、『セクシュアリティの歴史1』(1976)でセクシュアリティを哲学概念としたM・フーコーがエイズで既に死去した1988年に、セクシュアリティに関する「さらに探求すべき展望」(EN: 258)を示唆しており、彼のテキストにはクィアな読解可能性がありうる。尚、本論は、レヴィナス自身の「意図」を問うのではなく、彼のテキストが結果的に示す問題や可能性を考察するものである。

主にフェミニストの立場の研究者から、レヴィナスのセクシュアリティ論に批判が向けられており、特に、TI第四部で展開される「女性的なもの」概念や繁殖性概念に対して、女性蔑視や家父長制が指摘されている(cf. Irigaray, 1984: 173-199, Sandford, 2000: 33-81, Guenther, 2006: 75-89)。しかし、これらの先行研究は、例えばそのTI第四部がなぜ「顔の彼方へ」と題されるのかといった文献学的考察を欠く点で不十分である。本論は、先行研究に不足する文献学的考察を踏まえた上で、TIのセクシュアリティ論の主題が時間論にあること、そして、その時間論に家父長制や異性愛中心主義、シスジェンダー<sup>1)</sup>中心主義などの規範が潜在していることを明らかにする点にまず特徴がある。他方でまた、これらの先行研究は、レヴィナスのテキストがこれらの規範を逸脱し、クィアな読解可能性に開かれていることを見逃している。そこで本論は、彼の後期記述に着目し、そこにこの逸脱の可能性を見出す。

また、TI以降の後期レヴィナスはセクシュアリティの観点を欠くと批判が寄せられているが(cf. Ziarek, 2001)、本論はこの批判に対して、後期レヴィナスの記述がセクシュアリティ、特にクィアの観点から解釈可能であることを証明する。さらに付け加えれば、本論は、初期レヴィナスのセクシュアリティ論の規範性と可能性を論じた先行研究(cf. 古怒田, 2022)を発展させるものとなりうる。

本論は次のように展開する。第二節では、TIのセクシュアリティ論を時間論の観点から批判的に検討するための文献学的な足掛かりを作る。そこで、なぜTIが繁殖性という時間構造を要請するのかを、TIの論述を検討し明らかにする。第三節では、この繁殖性の時間構造が生殖を特権化する家父長的で、異性愛中心主義的かつシスジェンダー中心主義的な観点にあることを、TI第四部の「女性的なもの」概念から繁殖性概念へ至る時間論の展開から示す。第四節では、後期レヴィナスの記述が、このTIの繁殖性概念の規範性から逸脱し、クィアな読解可能性を含むことを論証する。そのためにまず、後期レヴィナスの老化論を読解し、この老化論がM・ブルーストの『失われた時を求めて』におけるセクシュアルな関係性の観点から具体化可能なことを示す。そしてさらに、レヴィナスのブルースト読解が表面上前提とする異性愛中心主義に反し、異性間の生殖から逸脱するクィアな身体性を『存在の彼方へ』(1974、以下AE)の愛撫論が示すことを論じる。

## 2. TIにおいてなぜ繁殖性の時間構造が要請されるのか

本節では、TIのセクシュアリティ論を時間論から批判的に検討するための足掛かりを作る。そのために、

なぜTIが繁殖性の時間構造を要請するのかを、その論述を追いながら明らかにする。そこでまず、この時間構造が「歴史の暴力」という問題を背景に導入されることを指摘したい。

TIにおいて「歴史」は個々の存在を抽象化する「諸国家の歴史」(TI: 332)という「全体性」(TI: 7)とみなされるが、同著が提示する「倫理」の主体はその死後にこの全体性に飲み込まれてしまう。そのため、TIは、世代を介して死後にこの倫理の主体の主体性を引き継ぐ繁殖性の時間構造を要請する。以下では、TIにおけるこのような議論を幾つかの論点に分けながら具体的に見てゆきたい。

まず、この歴史の「全体性」という暴力は、TIが主題とする「倫理」に関わる問題である。TIにおいて「他者の現前によって私の自発性が問い質されること」が倫理と呼ばれ(TI: 33)、この問い質しによって「呼びかけられたものは発話へと呼び求められている」(TI: 65)と見なされる。そして、この「発話」の構造の一つとして、この他者の問い質しに対して自己弁護する「弁明」(TI: 282)が提示される。しかし、TIによれば、この弁明を行う主体は、死後に「修史家」という「生き残り」によって「歴史」という全体性へ「統合される」ことで、その主体性が消失されることとなる(TI: 47-48)。したがって、TIが歴史の暴力を問題とするのは、同著の倫理の軸の一つである発話する主体が、死後の歴史においてその主体性が奪われるためである。次に、TIが論じるこの「歴史の暴力」の問題を、具体例を交えて考えてみたい。

ところで、「修史家」のような第三者の解釈に対して、主体はこの「弁明」を介して抵抗しうる。例えば、私がネット記事を書いたとしよう。そのネット記事(「所産」)は、私が不在の匿名のコメント欄において第三者によって暴力的に解釈されうが(「歴史の中の意思はその所産を起点にして解釈された人物として凝固する」[TI: 252])、私はその誹謗中傷に対して批判声明を出し自らの所産(記事)を弁護できる(cf. ibid)。つまり、歴史の暴力に抗して、この「発話は意思の弁護として生起」する「弁明」である(TI: 271)。しかし、私の死後もネットに残る記事に私は弁明できず、無防備に生き残りの歴史の暴力に曝され、文字通り死人に口なしとなる(cf. TI: 199)。

したがって、この歴史の暴力に抗するには、発話を介した倫理とは異なった関係が求められる。第三部「顔と外部性」に続いて、TIでセクシュアリティが主に論じられる第四部が「顔の彼方へ」と題されることになるが、「顔の彼方」とはまさに、同書で「顔」と呼ばれる発話を介した倫理(TI: 220)とは別の関係を示唆するものである。そこで、この「別の関係」としてTIは、繁殖性に根差した未来との関係を提示する。同著によれば、繁殖性を介することで主体の「死」は、三人称的な歴史との関係ではなく、「子孫」との「人格的な関係」(TI: 50)へと開かれる。同時に、この時間構造は「諸世代の非連続性」(TI: 301)と見なされる。つまり、繁殖性は、主体の死後の時間を、子孫へと「世代」を通して引き継がれ、同時に解釈し直される(=「非連続性」)未来に向かうことを可能とするのだ。

加えて、このような時間構造は、「無限の時間」とも呼ばれ、この時間を生きる「無限の存在」は、「つねに再開する=やり直す(recommençant)存在」、「主体性なしでは済ませられない存在」とみなされる(TI: 300)。すなわち、主体の死後も、その主体性が世代を介して「再開する=やり直される」という意味で、TIは繁殖性の時間構造を「無限の時間」と呼ぶのだ(「自我は主体性の繁殖性を介して生き延びる」[TI: 277])。村上靖彦が指摘するように、「個体の単独性を確保し続けるための装置として〔繁殖性の〕世代

交代は機能」する（村上, 2012: 190、カッコ内引用者）。

そして、この繁殖性の構造は倫理の主体を基づけるものである<sup>2)</sup>。TIによれば、「私が繁殖性を介して保持するのは[...]弁明の個別主義が、弁明の自我をその個別性をそのままに維持する実効的な善性に転換するために必要な無限の時間であり——その際、未だ主体的なものと自称するこの合致を、歴史が打ち碎き、押し潰すことはない」（TI: 317-318）。繁殖性の未来は、「弁明」を行う倫理の主体の主体性を、その主体の死後も、歴史の暴力に陥ることなく存続させる可能性の条件（「無限の時間」）となる。私は死後に自らを弁明できないが、私の意思をある面で引き継ぐ世代の弁明によって、私は「死人に口なし」とならず歴史の暴力を免れうる。したがって、倫理の主体の可能性の条件を主体の死後に想定するために、TIは繁殖性の時間構造を要請するのだ。

しかし、この繁殖性の時間構造は「息子における復活」（TI: 50）と特徴づけられており、そこには規範的な観点が垣間見られる。次節ではこの問題に取り組みたい。

### 3. 繁殖性概念の規範性

本節では、TIのセクシュアリティ論が主題とする繁殖性の時間構造が、生殖を特権化する家父長的で異性愛中心主義的かつシスジェンダー中心主義的な観点に根差すことを、TI第四部の「女性的なもの」概念から繁殖性概念に至る時間論の展開から明らかにする。

そこでまず、「女性的なもの」概念から提示される時間構造を見てゆこう。繁殖性の時間に先立ち、TI第四部B「エロスの現象学」において「女性的なもの」とのセクシュアルな関係の時間が記述される。

女性性のこの弱さを前にしたときの愛する男の運動は[...]愛撫の自己満足に没入してゆく。  
[...]愛撫とは、[...]あたかもいまだないかのように逃れ去るものに訴えることである。[...]それが満足された場合でも、愛撫に活力を与える欲望は、いまだないものによって、いわば養分を補給されて再生し、決して侵されることのない女性的なものの処女性に私たちを連れ戻す。（TI: 288、強調原文）

レヴィナスは、異性の男女（「愛する男」と「女性的なもの」）のセクシュアルな関係（「愛撫」）が、ある種の未来（「いまだない」）を目指すことを論じている。そして、この未来は、繁殖性を下支えする時間構造とされるものである。この点をTIのテキストに沿って説明するために、この「いまだない」が「無以下のもの」と言い換えられる点に注目したい。TIによれば、この「無以下のもの」は「予期に差し出されている可能事とはまったく別の仕方では潜んでいる」（TI: 288、強調原文）。

ここで強調される「可能事」は、主体の「権能＝可能性（pouvoir）」に関わり、未来という時間性の文脈ではハイデガーの「死に臨む存在」を批判的に言い換えた概念である。実際、1948年の『時間と他なるもの』で既に、「死に臨む存在」は、「現存在による実存の最後の可能性の引き受け」（TA: 57）と呼ばれ、1957年の「哲学と無限の観念」では「現存在の無は死、つまり私の死、（不可能性という）私の可能

性、私の権能＝可能性である」(EDE: 235)と記される。そして、1961年のTI第四部では「存在そのものを構成しはするが未来との関りを主体の権能＝可能性に変形させてしまうハイデガー的な可能性」(TI: 300)とは異なった未来を論じると述べられる。渡名喜庸哲が論じるように(渡名喜, 2021: 248-275)、ハイデガー的な「権能＝可能性」としての投企とは異なった未来との関係を示すことが、TIまでのレヴィナスのセクシュアリティ論の思想史的な企図である。したがって、異性の男女のセクシュアルな関係の「いまだない」という時間構造は、主体の死の権能＝可能性とは異なった未来を狙うものであり、ハイデガー的な「死の無」(Heidegger, 1967: 266)とは異なるという意味で「無以下のもの」と言い換えられるのだ。では、この「無以下のもの」とは何なのか。それは「子どもの未来」である。

他者であると同時に私自身でもある子どもとの関係——子どもを欲すること——は、官能の内で既に描かれており、子ども自身の内で成就する[……。]。今や私たちは新しい範疇を前にしている。すなわち[……。]エロスが否定性から引き剥がしてきて冒瀆する「無以下のもの」を前にしている。これは、不安の無とは区別される無、「無以下のもの」の秘密の中に埋められた未来の無である。(TI: 298-299)

レヴィナスは「不安の無」(ハイデガー的な「死の無」)とは区別される「無以下のもの」あるいは「未来の無」を、官能を介した「子どもを欲すること」とみなす。つまり、彼は、異性の男女のセクシュアルな関係が行き着く未来を、子どもの未来だと論じるのだ。

しかし、この主張には幾つかの問題が伴う。まず、上記の記述の直後のTI第四部C「繁殖性」において、この「子ども」を「息子」に限定する言説を展開することで(TI: 299)、レヴィナスは、娘そして男女二元論に当てはまらない子どもの可能性を排除している。また、彼は、「「いまだない」という現象がそこに根差す時間の第一の現象」、つまり、異性の男女のセクシュアルな関係の時間が基づけられる水準を「父性」とみなす(TI: 277)。さらに、この「父」と「息子」から導き出される関係性は「兄弟たち」からなる「兄弟関係」に限定され、「家族」として纏められている(TI: 312-313)。すなわち、彼は、「父」と(いつかその父となる)「息子」と「兄弟」という男性を「家族」における生殖の主体とする家父長的な観点を特権化している。

したがって、「女性的なもの」概念から繁殖性概念へ至る展開において、TIのセクシュアリティ論が主題とする時間論は、生殖を特権化する家父長的で、異性愛中心主義的かつシスジェンダー中心主義的な観点から描かれている。倫理の主体の可能性の条件としての繁殖性は、TIのテキスト上では、普遍的なものではなく、生殖を行う家父長的なシスジェンダーで異性愛者の主体性に限定されるのだ。事実、TIは、「可視的な歴史の背後に真理が現出するために必要な時間は、父性がなければ不可能だろう」(TI: 277)と、あくまでも「父」を主体とした生殖の時間において、歴史の暴力への抵抗は可能になると論じている(ゆえに、本論は、TIの繁殖性概念を生殖から切り離す石井・高井, 2019: 74や渡名喜, 2021: 416-457のような解釈を取らない)。

ところで、このような批判的解釈に対して、TIの繁殖性概念は経験的な生殖にのみ依拠しないとの反論が予想される。例えば、繁殖性は「生物学的経験を乗り越える構造を描いている」(TI: 310)と主張することで、レヴィナスは経験的な生殖のみを扱っているのではないと。実際、伊原木大佑は、レヴィナスが論じる「生殖は生物学的・経験的なレベルに収まる概念」ではなく、「独特な精神的結合の様式」という「肉体間の繋がりを欠いたところで父子性や兄弟性を論じる余地」があると論じ(伊原木, 2015: 28-29)、檜垣立哉は息子概念を「未来において他者が産まれつづけること」という「増大のイメージ」と解釈し、「ここでの他者性からは」、「自分の生物学的な子であるという意識は排除されるべきではないか」と語る(檜垣, 2012: 152-153)。

しかし、繰り返しになるが、レヴィナスが繁殖性概念で念頭においている観点は、シスジェンダーで異性愛者の家父長的な主体を前提とした生殖の観点であって、普遍的に妥当するような生殖の観点ではない。言い換えれば、彼の論じる生殖の観点は、異性愛者でシスジェンダーの男性を主体とした生殖を象徴するものであって、普遍的な生殖あるいは繁殖を象徴するものではない。実際、『饗宴』におけるアリストファネスの同性愛者を含むエロスの神話を、TIは「色恋を自己への回帰とみなす解釈」(TI: 285)と定義し、繁殖性の時間構造をこの「自己への回帰」とは正反対の出来事と見なすことで(cf. TI: 301)、同著が提示する未来の構造から同性愛者を暗に排除している<sup>3)</sup>。さらに、繰り返しになるが、TIの繁殖性概念は、「子ども」を一義的に「息子」とみなすことで、「男」という出生時に割り当てられた性別とは異なったジェンダーをそれぞれの仕方では生きるトランスジェンダーのような存在の可能性を否認している。

したがって、レヴィナスのテキストの枠内では、例えば、トランスジェンダーや同性愛者の生殖を想定することは不可能であり、繁殖性概念を象徴として解釈したとしても、彼のテキストが含んでいるシスジェンダー中心主義や異性愛中心主義から逃れることはできない(先行研究のように「増大のイメージ」のような仕方では普遍的な生殖の概念として繁殖性概念を捉えてしまうと、レヴィナスがなぜ、親子関係や母子関係ではなく、「父性」や「息子」といった観点から繁殖性概念を展開したのかが説明できなくなってしまうだけでなく、それらの観点が含む問題を普遍化することにも繋がらう<sup>4)</sup>。

では、レヴィナスのテキストにはクィアは全くその居場所をもたないのだろうか。次節では、この問いに後期レヴィナスの記述の読解から応答を試みたい。

#### 4. 後期レヴィナスにおけるクィアな読解可能性

本節では、後期レヴィナスの記述がTIの繁殖性概念の規範性を逸脱し、クィアな読解可能性に開かれることを、彼の老化論と彼の愛撫論の読解から証明する。

##### 4.1 プルースト的セクシュアリティ

後期レヴィナスは、TIの繁殖性概念において「障害」(TI: 301)とみなしていた老化の経験を引き受けるようになる。例えば、「問いと応答」(1977)で彼は、「世界の中で老化する人間性」(DQVI: 141、

強調原文)を出発点として自らの方法論を語る。この「老化する人間性」は、ある面でブルーストの『失われた時を求めて』に着想を得ており、この着想の観点から見たとき、TIの繁殖性概念の規範性を逸脱する。この点を明らかにするために、まずはAEで記述される老化の時間と関係性の構造を概観したい。

後期レヴィナスは、老化という概念で苦痛の現象を捉えようとする (cf. AE : 92-94)。そして、この老化の苦痛の受動性から彼は、繁殖性とは異なる時間構造を引き出している。

想起あるいは歴史＝物語 (l'histoire) による表象＝再現前化によっては回収不可能な隔時的過去、言い換えれば、現在と同一単位で計ることのできない隔時的過去に照応、あるいは呼応しているのは、引き受け難い自己の受動性である。「過ぎ去る」を含意する「se passer」という表現は有用な表現である。そこで自己は、「能動的総合」なき老化のように自己を過ぎ越した過去の内で描かれる。(AE : 30、濁点原文、下線引用者)

上記の「歴史」は、TIが論じたような歴史の暴力ではなく、過去を想起作用によって表象＝再現前化し現在に集約する働きとしての「歴史＝物語」である。老化の時間構造は、このリニアな想起作用に反する「隔時的過去」と見なされている。

したがって、後期レヴィナスは、過去とのある種の断絶（＝想起作用に反した関係）を含んだ時間構造を、苦痛を伴う老化の経験から引き出している。

では、このような老化から生きられる「隔時的過去」とは何なのだろうか。それは、ある種の関係性である。

誰が不在であろうと、回避不可能な仕方では何者かであることを呼びかけられる者、それが主体である。[...] 老化という隔時的時間性としてのこの主体の存在者の存在の形をとって、呼びかけへの応答は、自我の意思に反して生じる [...]。(AE : 90、強調原文)

レヴィナスは、「老化という隔時的時間性」において、「回避不可能な仕方」での「呼びかけ」(とその「応答」)という何らかの他者からの受動的な触発が生じるとみなす。つまり、老化の経験を通じて、受動的な仕方では他者と繋がる構造を彼は論じているのだ。そして、この触発からなる老化の関係性の構造を、彼は「近さ」と概念化する (cf. AE : 90)。この近さは、空間的接近ではなく、想起作用に還元されない過去に存在した他者との関係性を意味する。この点を、「言葉と近さ」(1967)の以下の記述から具体的に把握したい。

だが、もろもろの事物に触れていた手たち、存在者たちによって踏み固められた場所 [...] 書きとめられた言葉たち、名残の品々、遺品たち、こうしたあらゆる事物へ向かって、人間の顔と皮膚を起点として、やわらかさが広がる。すなわち、認識は近さへと、純粋に感覚的なものへと回帰する。世界内で対象と道具として資格付けられた物質は、人間性を介することで [その場合]、その近さによって私に憑りつく物質でもある。(EDE : 318、カッコ内引用者)

「名残の品々」や「遺品たち」という言葉が示すように、事物を介して過去に存在した他者が受動的に触発する（「憑りつく」）現象、それが近さの一つのあり方である。それは、例えばフラッシュバックのように、自分から何かを思い出すのではなく、事象に触発させられて過去の出来事（ここでは過去に存在した他者との関係性）が浮かび上がってくる現象である。したがって、近さという老化の構造は、能動的な想起作用に還元されない過去に存在した他者との受動的な関係性である。では、この関係性は具体的にどのようなものなのか。本論は、この関係がある種のセクシュアルな関係から具体化可能なことを、レヴィナスのプルースト読解から示す。

ところで、以上の老化の記述は、プルーストの『失われた時を求めて』にある面で依拠している。というのも、1961年のTIでは、「失われた時を求める想起」が「老化」に結び付けられ（TI：314）、「志向性と感覚」（1965）では、フッサールが記述する現印象からのずれとしての時間意識の構造が「老化と失われた時を求めること」（EDE：216）とみなされるからだ。さらに、1974年のAEでは、老化の隔時性が「回帰することなき失われた時」（AE：88）と呼ばれる。このように、レヴィナスは断続的に『失われた時を求めて』から老化を記述するのだ。

そして重要なことに、レヴィナスにおける老化という主題は、プルースト的セクシュアリティに着想を得ている。初期に当たる1940年代の捕囚手帳で彼は、『失われた時を求めて』において主人公がアルベルチヌと離別した状況が、「健康自体が衰えてしまうこと」（Proust, 1992：8）と例えられる描写に注目する（CE1：72-73）。そして、この描写を彼は、「この病や老化はある種の着想への肯定的{かつ適切な}接近である」（CE1：73）と分析する。彼は「健康自体が衰えてしまう」という主人公の語りを比喻ではなく、老化について論じることが、別のアイデアを構想すること（「着想」）に繋がると見なすのだ。

このアイデアの構想の一つは、主人公と死したアルベルチヌとのセクシュアルな関係性に関する構想である。というのも、一方で、同年代の捕囚帳でレヴィナスは、『失われた時を求めて』の主題を「消え去って死したアルベルチヌ」としつつ、その「アルベルチヌとの結びつきをなすのは、マルセル〔主人公〕の苦痛である」とみなし（CE1：145、カッコ内引用者）、他方で、同時期に構想、発表されたプルースト批評で、彼はこの関係を「愛」や「エロス」と呼んでいるからだ（NP：122）。つまり、初期レヴィナスがプルーストにおける老化という主題を論じる際に念頭に置いているのは『失われた時を求めて』におけるセクシュアルな関係性であり、「健康自体が衰えてしまう」という「老化」のような「苦痛」を、彼は死したアルベルチヌと主人公のセクシュアルな繋がり契機とみなしているのだ。したがって、初期レヴィナスは、苦痛を伴う老化の経験からプルースト的セクシュアリティを捉えていると解釈できる。

また、このプルースト批評において初期レヴィナスは、死したアルベルチヌとのこのようなセクシュアルな関係を「近さ」と呼んでいる。彼によれば、死したアルベルチヌ、つまり死者とのセクシュアルな関係が、「近さ」である（cf. NP：122-123）。そして、このアルベルチヌの「不在」（死）は、不在を再現前化させるものではない（cf. NP：ibid）。そうではなく、「アルベルチヌの不在」が「彼女の現前」の契機になる、つまり彼女の死（＝「不在」）が、彼女と主人公の繋がり契機となるのだ（cf. NP：123）。

翻って、1974年のAEでは「近さ」が、「現在なき快樂」や「他者を介してセクシュアルに享受し苦しむこと」というセクシュアルな経験から具体化され、この「他者」は「死」と結びつけられている（cf. AE：143-145）。すなわち、「近さ」は、主体をセクシュアルに触発する死者との関係（「他者を介して享受」、「快樂」）を含意し、この触発は充足することなく苦痛を伴う（「苦しむ」、「現在なき快樂」）とみなされている。換言すれば、老化の「近さ」には、死したアルベルチヌのような不在の他者とのある種の苦痛を介したセクシュアルな関係が含まれるのだ。したがって、初期の近さ概念と後期の近さ概念は、レヴィナスのブルースト読解の観点において連続しているといえる。

以上から、能動的な想起作用に還元されない過去に存在した他者との受動的な関係性という後期レヴィナスの老化論の観点は、彼が初期から構想していたブルースト的セクシュアリティから具体化可能である。事実、ブルーストは、この老化の構造を含意するセクシュアルな関係性を記している。アルベルチヌの死の知らせを聞いた後、主人公は以下のように語る。

アルベルチヌの悪徳の現実が、私の心のこんなに深くまでしみ通らせた苦痛は、ずっと後になってからたいそう役に立った。私が祖母に与えた苦しみのように、アルベルチヌが私に与えた苦しみは、彼女と私の間の最後の繋がりであり、思い出よりもさらに長く生き延びた。というのも、あらゆる身体的なものがもっているエネルギーの保存によって、苦痛は記憶の与える教訓さえ必要としないからだ。たとえば、月光を浴びて森で過ごした美しい夜の数々を忘れてしまった人も、そこで罹ったリュウマチには依然として苦しみ続けるように。（Proust, 1992：108）

能動的な想起作用を越えた（「思い出よりもさらに長く生き延びた」）アルベルチヌとの「最後の繋がり」となるこの「苦痛」は、主人公の老化から生きられるものである。ブルーストは老化が主題となる『失われた時を求めて』の最終巻で、アルベルチヌを愛したことを老化と共に忘却しながらも（cf. Proust, 1990：349）、その老化の身体的苦痛を介して、彼女の思い出が主人公を受動的に触発し「苦しめ」、「彼女はもう死んでしまった」と呟く彼の姿を描いている（cf. Proust, 1990：352）<sup>5)</sup>。そして、ブルーストによれば、彼のアルベルチヌへの愛はこのような苦しみからなるものである（cf. Proust, 1992：190-191）。

以上のような後期レヴィナスの老化論におけるブルースト的セクシュアリティの観点は、老化という受動的な苦痛を介した過去の他者とのセクシュアルな関係である点で、生殖を特権化する家父長的な観点を逸脱する。ブルースト的セクシュアリティは、異性間の生殖を前提としていた中期レヴィナスのセクシュアリティ論とは異なったセクシュアリティの観点を与えてくれるものののだ。

#### 4.2 クアな身体性

だが、『失われた時を求めて』がアルベルチヌの同性愛を描くにもかかわらず、レヴィナスのブルースト読解は彼女と主人公との異性愛に限定されており、後期においても彼の観点は依然として異性愛中心

主義的ではないかという疑念が残る。この問いに対して本論は、AEの愛撫論の読解から、後期レヴィナスにおける異性間の生殖に還元されないクィアな身体性の可能性を示したい。

後期レヴィナスはAEにおいて、愛撫を「内臓同士の接触」や「皮膚が皮膚の下に入り込むこと」に至る経験として記述する（AE：19）。ここで彼は、セクシュアリティの身体経験を、「内臓」や「皮膚」という、セクシュアリティに関する規範的観点の特権化する性器的セクシュアリティのような特定の身体器官に位置づけられない身体性から記述しているといえる。すなわち、AEの愛撫論は、例えば、出生時に割り当てられた「男」という性別から意味づけられたペニスによって、異性愛者のシスジェンダー男性であることを期待、要求する規範から逸脱する身体性を示しているのだ。したがって、この愛撫論は、同性愛者やトランスジェンダーのような存在が生きるクィアな身体性に拡張可能である。

ただし、レヴィナスは、このようなクィアな身体性を生きること、自由に快楽を選択できるような能動性ではなく、ある種の不安定性を抱えたものとみなしている。というのも、彼は上記の「皮膚」に拡張される「快楽」の経験の内に、自己充足の経験ではなく、「自我の自己との不一致」や「動揺」を見出すからだ（cf. AE：104-105）<sup>9)</sup>。つまり、クィアな「快楽」の経験の中で、自己が揺るがされると彼は考えるのだ。実際、愛撫の事例として、彼が「キス」を取り上げるとき、そこで強調されるのは「把持することから捉えられること」に転じるという自己の不安定性への移行である（AE：121、強調原文）。

そして、この不安定性は、以下のような愛撫の他者関係にも見出される。

愛撫においては、そこに存在するものは、あたかもそこに存在しないかのように探し求められる。いわば、この場合、皮膚は愛撫される存在自身の撤退の痕跡であり、それゆえ愛撫とは、このうえもなくそこに存在するものを、不在として探求し続ける焦燥なのだ。[...] 皮膚の柔らかさ、それは接近するものと接近されるものとのずれであり、このずれは離散性、非志向性、非目的性である。その結果、愛撫の無秩序が、隔時性が、現在なき快楽が[...] 生じる。近さ、直接性、それは、他者を介して享受し苦しむことである。（AE：143-144）

TIとは異なり、愛撫の対象は「女性的なもの」に限定されていない。それは、愛撫の対象が「そこに存在するもの」という女性に限定されない仕方で表現されているからであると同時に、愛撫が、生殖器のような特定の身体器官に位置付けがたい「皮膚」に触れるとされているからだ。そして、「接近するものと接近されるものとのずれ」や「離散性、非志向性、非目的性」と特徴づけられる愛撫の関係性は、主体が統御できない不安定な関係にあることを示している。ゆえに、愛撫は「無秩序」となり、その快楽は自己充足することのない「現在なき快楽」となる。したがって、AEの愛撫論は、関係性の水準においても、クィアな身体の間不安定性を論じているのだ。

他方で、上記の愛撫の記述は、「不在」や「近さ」、「隔時性」といった仕方で、不在のアルベルチヌとの関係のようなブルースト的セクシュアリティが意識されている。ゆえに、ブルースト的セクシュアリティは、異性愛に限定されない関係性として、後期レヴィナスのテキストにおいては解釈可能である。

さらに、このようなAEの愛撫論は、クシア理論と交錯する射程をもつ。そこでまず、L・ベルサーニのクシア理論を参照したい。

ベルサーニは「直腸は墓場か？」(1987)において、ゲイ男性のアナルセックスの身体性(「直腸」)を「墓場」と呼び、そこに権力関係を内面化した「誇り高き主体性という男性性の理想像」、「内面化されたファリックな男性性」が瓦解する「自己の壊乱、自己の喪失の危険」を見出す(Bersani, 2010: 29-30、強調原文)。彼は、ゲイ男性のアナルセックスの只中で挿入される身体的不安定性を通して、権威的な男性性を含んだ主体が瓦解する出来事を捉えているのだ。ところで、このベルサーニの理論は、彼が『フロイト的身体』(1986)で展開した、S・フロイトの性源域(erogene zone)概念の解釈に依拠している(cf. Bersani, 2010: 24-25)。フロイトによれば、性源域は「皮膚」のような「あらゆる身体部位および内臓の諸器官」(Freud, 2007: 86)にまで拡張されうるのである。この性源域が特定の身体領域や対象に位置づけられない点から、ベルサーニは、セクシュアリティを、「セクシュアルなものへの感応性」、つまりあらゆる身体領域や対象がセクシュアルに触発する可能性と解釈し、この経験を「構成された自己」によって統御不可能な現象とみなす(cf. Bersani, 1986: 38-39)。このようなフロイト解釈から彼は、アナルセックスのようなクシアなセクシュアリティが、ファルスに位置付けられた男性性(ある種の「構成された自己」)を瓦解させる仕方を論じるのだ。

翻って、AEの愛撫論にこのベルサーニの理論を垣間見ることができる。というのも、この愛撫論は、ベルサーニの理論と同じく「皮膚」や「内臓」というフロイトの性源域の観点から解釈可能なものであり、そこで、生殖を特権化する家父長的で、異性愛中心主義的かつシスジェンダー中心主義的な観点(ある種の「ファリックな男性性」の観点)が瓦解しつつ、セクシュアルな経験は不安定性から浮き彫りになっていたからだ。事実、後期レヴィナスも、「皮膚」にまで拡張されるクシアな身体性を生きること、それを介して「自己」が感応性そのものとなるもの(AE: 172)と呼んでいる。したがって、彼の後期愛撫論はクシア理論と交錯しうるのである。

## 5. おわりに

本論は、TIがクシアの存在を抹消する問題を引き起こしていることを指摘すると同時に、後期レヴィナスの記述がこの規範性から逸脱し、クシアな読解可能性を含むことを論じた。以上から、レヴィナス思想におけるセクシュアリティ論は、その規範性を引き受けたとしても、クシアな可能性に開かれうるものである。

だが、本論は、ある種の生殖中心主義を批判しながら、生殖に基づかないクシアな「未来」の可能性を提起することができなかった。例えば、ベルサーニは、J・ジュネの『葬儀』(1947)を読解し、ゲイ男性のセクシュアルな経験の内に、生殖に還元されないクシアな未来の可能性を指摘している(cf. Bersani, 1995: 164-166)。では、レヴィナスのテキストの内にこのような未来を見出すことはできるのだろうか。論点の一つは、後期レヴィナスが「ユートピア」という観点から未来を考えることだろう(DMT: 107-

133)。というのも、このレヴィナスの観点から、先行研究においてクィアな未来の可能性が示唆されているからだ (cf. 古怒田, 2019)。したがって、本論が見出した後期レヴィナスにおけるクィアな読解可能性の観点に依拠しつつ、彼の後期ユートピア論におけるクィアな未来の可能性を問う必要がある。この本論以降の課題を提起することで、本論を閉じたい。

## 文献

- [1] ペンスーサン, ジェラルド, 2014, 「両義性と二元性:レヴィナスにおけるエロスのなものについて」(合田正人編『顔とその彼方』知泉書館, 213-232) .
- [2] Bersani, Leo., 1986, *The Freudian Body*. Columbia University Press.
- [3] 同., 1995, *Homos*. Harvard University Press.
- [4] 同., 2010, *Is the Rectum a Grave? and Other Essays*. The University of Chicago Press.
- [5] Freud, Sigmund., 2007, *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*. Fischer Taschenbuch.
- [6] 合田正人, 1999=2011, 『レヴィナスを読む』ちくま学芸文庫.
- [7] Guenther, Lisa, 2006, *The Gift of the Other*, State University of New York Press.
- [8] Heidegger, Martin, 1967, *Sein und Zeit*. Max Niemeyer.
- [9] 檜垣立哉, 2012, 「逆向き幽霊としての子供: デリダに対抗するレヴィナス」(『現代思想』第40巻第3号, 青土社, 147-157) .
- [10] 伊原木大佑, 2015, 「E・レヴィナス「エロスの現象学」における二元性の問題」(北九州市立大学基盤教育センター編『基盤教育センター紀要』第23号, 15-30) .
- [11] Irigaray, Luce., 1984, *Éthique De La Différence Sexuelle*. Les Éditions De Minuit.
- [12] 石井雅巳・高井寛, 2019 「倫理は分離を前提とする:『全体性と無限』における自我論と他者論の関係について」(レヴィナス協会編『レヴィナス研究』第1号, 65-76) .
- [13] 石井雅巳, 2021, 「レヴィナスにおける反 - 歴史論の展開と変遷」(日本倫理学会編『倫理学年報』第70号, 147-160) .
- [14] 古怒田望人, 2018, 「老化の関係性:レヴィナスにおけるプルーストから」(日仏哲学会編『フランス哲学・思想研究』第23号, 163-173) .
- [15] 同, 2019, 「トランスジェンダーの未来=ユートピア:生殖規範そして「未来」の否定に抗して」(『現代思想』第47巻第14号, 青土社, 198-208) .
- [16] 同, 2022, 「初期レヴィナスにおける性の記述の問題:その規範性と可能性をめぐって」(日本現象学・社会科学会編『現象学と社会科学』第5号, 43-57) .
- [17] Levinas, Emmanuel., 1947=1990, *De l'existence à l'existant*, Vrin. (=EE)
- [18] 同, 1948=1983, *Le temps et l'autre*, Puf. (=TA)
- [19] 同, 1961=1990, *Totalité et infini*, « Le Livre de poche » . (=TI)
- [20] 同, 1967=2006, *En découvrant l'existence*, Vrin. (=EDE)
- [21] 同, 1974 = 2001, *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, « Le Livre de poche » . (=AE)
- [22] 同, 1976, *Noms Propres*, Fata Morgana. (=NP)
- [23] 同, 1982=1992, *De Dieu qui vient à l'idée*, Vrin. (=DQVI)
- [24] 同, 1991, *Entre nous*, Grasset. (=EN)

- [25] 同, 1993=1995, *Dieu, la mort et le temps*, « Le Livre de poche ». (=DMT)
- [26] 同, 2009, *Œuvres, t.1, Carnets de Captivité suivi de Écrits sur la Captivité et Note philosophiques diverses*, Grasset-IMEC. (=E1)
- [27] 村上靖彦, 2012, 『レヴィナス』 河出書房新社.
- [28] Proust, Marcel., 1992, *Albertine disparue*. Folio Classique.
- [29] 同, 1990, *Le Temps retrouvé*. Folio Classique.
- [30] Sandford, Stella. , 2000, *The Metaphysics of Love*. The Athlone Press.
- [31] 渡名喜庸哲, 2021, 『レヴィナスの企て』 勁草書房.
- [32] Ziarek, Plonowska Ewa., 2001, “The Ethical Passion of Emmanuel Levinas” in in Chanter, Tina. (ed.) *Feminist Interpretations of Emmanuel Levinas*. The Pennsylvania State University Press, 78-95.

## 注

- 1) 出生時に割り当てられた性別に沿って生きるジェンダー。非トランスジェンダー。
- 2) この点に関しては石井, 2021 をも参照。
- 3) この点に関しては、合田正人がTIのセクシュアリティ論において同性愛の禁止がなされていると指摘している点をも参照 (cf. 合田, 1999=2011 : 210)。
- 4) L・グンサーは、レヴィナスのテキストに逆らいつつ、彼の繁殖性概念から主体性をはく奪させられている母と娘たちの経験を、彼のテキストから拡張的に見出すという試みを行っている (cf. Guenther, 2006 : 89-94)。本論とは異なった仕方ではレヴィナスのセクシュアリティ論を拡張的に解釈したものとして参照されたい。
- 5) この点に関しては古怒田, 2018 : 167-170 をも参照。
- 6) この参照箇所は享受が論点だが、TIのセクシュアリティ論の「他者を享受する可能性」(TI : 285) と同じく、享受はAEにおいてセクシュアリティと地続きに捉えられており (cf. AE : 144)、そこにはセクシュアリティの観点も含意されていると解釈できる。

## **Opening up queer possibilities in Levinas: From problems of fecundity in *Totalité et infini* to the development of Late Levinas**

Asahi KONUTA

### **Abstract:**

The purpose of this study is to critically examine the normativity of E. Levinas's theory of sexuality and to present possibilities that emerge despite its normativity. To that end, I try to articulate both normativity and possibilities of his theory of sexuality from the standpoint of "queer."

In the first section, I set out a philological foothold to critically examine the theory of sexuality in *Totalité et infini* from the viewpoint of temporality. For this purpose, I explain why this book demands the temporality of fecundity.

In the second section, I explain that the temporal structure of fecundity lies in a patriarchal, heterocentric, and cisgender-centric perspective that privileges reproduction.

In the final section, I demonstrate that Levinas's late writing departs from the normativity of the concept of fecundity and includes queer readability. To that end, I first read late Levinas's theory of aging and show that this theory can be materialized from the perspective of sexual relationships in M. Proust's *À la recherche du temps perdu*. Furthermore, I argue that contrary to the heterocentrism that Levinas's reading of Proust ostensibly presupposes, the theory of caress in *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence* (1974) shows a queer bodiness that deviates from heterosexual reproduction.

**Key Words :** Emmanuel Levinas, Sexuality, Queer, Queer Theory, Fecundity